

第 13 回全国大会「危機的時代における世代間交流がもたらす持続可能なコミュニティづくり」  
を開催して

第 13 回大会長 亀井智子

2022 年 9 月 3 日(土)は第 13 回全国大会が 3 年ぶりに参加者相互に語り合える対面スタイルに戻ることが実現したマイルストーンの日となりました。

参加者は 70 名を数え、教育・研究・実践者の他、院生・学生・企業からの参加も得られ、会場内では身体的距離を保ちつつも、同じ目標をもつ世代間交流の教育・実践・研究者の学術的、情緒的つながりを密にもつことができた大会を開催することができました。

大会テーマは「危機的時代における世代間交流がもたらす持続可能なコミュニティづくり」でした。危機的時代とは、少子超高齢社会や人口減少、人口偏在などの急速な進展、経済や健康格差、そして長引くコロナの影響による異世代間の物理的・身体的接触機会の減少に伴う世代間の隔絶などを含意しています。持続可能なコミュニティづくりとは、2030 年までの国際目標である「持続可能な開発目標(SGDs)」を意図しています。

特別講演演者のピーター・ホワイトハウス教授(ケースウエスタンリザーヴ大学)はこのテーマにいち早く応答し、「危機は新たな時代の幕開けのための opportunity (よい機会)」であるとし、多様な実践例を上げながら「人は孤独と絶望に最も脆弱であるが、世代間交流は、活動を通じて希望を見つけるための鍵となる」と提言されました。

教育講演演者の垣花渉教授(石川県立看護大学)は、大学のゼミにおいて、学生が地域に向き、協働することによって課題解決を図り、学生が学年を超えて相互に学び合う姿を地域社会側が共感するという「互惠的協働社会」の実例を講演されました。

シンポジウムでも大学生のもつ力に焦点をあて、片木孝治氏(㈱応用芸術研究所)からは、次世代下宿:京都ソリデールの実践例、小川孝之先生(京都橘大学)からは、団地や図書館、自治体と作業療法学生との協働から、ニーズに沿った“つながる”事業への展開について、斎藤ゆか先生(神奈川大学)からは、世代間交流を取り入れた「社会参加型」教育とその評価方法、菊田文夫先生(聖路加国際大学)からは、看護学生と高齢者の交流を取り入れたいのちを健康で彩る「ヒューマニティ教育」を通じた学びについて講演いただき、持続可能な大学生の力の引き出し方を討議することができました。一般演題は、口演 6 題、示説 6 題をご発表いただき、質疑が活発に行われました。

本大会を通じて、多彩な世代間交流の在り方に触れ、危機的状況下であっても工夫を凝らし、身近な場所での人と繋がりーレガシーとストーリーをもった意味のある交流ーを共に作る姿勢が、持続可能なコミュニティを作ることにつながると考えられました。

大会開催にあたり、内閣府はじめ、東京都、都教育委員会、中央区、中央区教育委員会、NPO 法人日本世代間交流協会様からのご後援、これに加えて企業 12 社様からのご協賛を得ることができ、何とか収支も健全に運営することができました。

最後になりましたが、参加者、企画・実行委員、ボランティア、その他大会にお力添えをいただいたすべての関係の皆様にご心より御礼申し上げます。